

障害のある人とない人が「共通のいきがい」の創造を目指し活動する大阪の市民グループ「ジエネシス オブ エンターテイメント」(坪田建一代表、60人)が16日、結成10周年を記念して車いすダンスの公演を大阪市浪速区のリパティおおさかで開く。「障害者としてではなく、ダンサーとしての自分たちを見てほしい」。メンバーのそんな思いから、公演は初めて有料とした。

(服部素子)

同グループの発足は平成9年、代表の坪田さんの友人が自動車事故で、車いす生活となったことがきっかけだった。

「きのうまで一緒に遊んでいたヤツが車いすになった途端、『障害者は、遊んだらあかん』的な世間の目にさらされた。それは、おかしいと思ったんです」と坪田さん。

押しつけのレクリエーションではなく、自分たちのやりたい娯樂をやろう。そんな思いでグループを結成し、モータースポーツとダンスを2本柱に据えて活動をスタート。その後、障害のある人とない人が対等の立場で技術を磨き、思いを表現できる車いすダンスが活動の中心になっていった。

いまでも障害者福祉の分野では娯樂に焦点をあてた活動は少なく、発足当初はそれこそ奇異な目で見られることが多かったという。それでも、車いすダンスの一般への普及を目指して地道に講習会を開催。現在は車いすダンスの教室と、学校や行政機関向けの講演会を年間計約1000日開いている。

芸術としての車いすダンスを

16日 10周年記念公演



公演に向け練習に励む車いすの鈴木さんと蛭池さんのペア。「心に響くダンスを伝えたい」という
大阪府中央区の大阪社会福祉指導センター

メンバーはいずれも車いすダンスの初心者だったが、一昨年には鈴木剛さんと蛭池千尋さんのペアが「全日本車いすダンススポーツ選手権大会競技会」のラテンダンス部門で優勝。昨年台湾で開催されたアジア大会でも2人が3位に入るなど、競技会で上位入賞者を輩出するようになった。

記念公演のタイトルは「Begin with One Heart(ひとりの心からはじまる)」。車いすダンサー12人と、ペアを組む12人の計24人が出演し、ペアダンスをはじめ、車いす

ダンサー4人のユニットによるスピーディーなサンバや、全員で踊る「YMCA」など約20曲のシ

ョーを披露する。

「重い障害のある人が踊れば、上手下手にかかわらず絶賛されるというのは、ぼくらの目指しているものとは違う。必死になって伝えたいことがある、それが伝わってこそ芸術。障害を前提として見てもらうのではなく、それを超えたダンスを見せたい」と、鈴木さんと蛭池さん。公演はメンバーのこうした思いから有料とした。

障害は超えることはできないが、障害への絶望や葛藤は超えることができる。メンバーはその思いを踊りに込め、ダンサーとして経済的自立も目指したいという。

16日午後1時半～3時半。参加費は大人1000円、大学・高校生900円、65歳以上・中学生以下・障害者750円。チケットの申し込み、問い合わせは、リパティおおさか(☎06・65661・5891)。

情報BOX

「高齢社会を共に生きる」シンポ記録集を無料配布

日本生命財団が昨年11月に東京で開いたシンポジウムの記録集「高齢社会を共に生きる」がこのほど完成し、希望者先着1000人に無料(送料自己負担)配布するに役立つテキストとなっている。

「がんばらない」「あきらめない」などの著書でも知られる諏訪中央病院の鎌田實・名誉院長と東京都老人総合研究所の本間昭・研究部長の講演を収録。認知症高齢団「記録集」係。

申し込みは、送料(切手290円分)を同封の上、〒541-0042 大阪市中央区今橋3の1の7 日生今橋ビル 日本生命財団「記録集」係。

市民グループ「ジエネシスオブエンターテイメント」

生活